男女共同参画を考える情報紙

あの・なはん

No.78

あの・なはん　盛岡弁で「あのねぇ」と呼び掛けることば

「あの・なはん」はボランティアの「あの・なはん編集員会」が編集しています。担当：男女参画国際課☎626-7525

女性が求める医療

女性の体は、一生の間に初経（初潮）、妊娠、出産、閉経と劇的に変化します。それゆえに、多くの女性は、心の悩みや体の不調に苦しんでいるのではないでしょうか。
今回は、男性とは異なる女性の体の仕組みに注目した性差医療と女性外来について考えてみました。

■女性外来を知っていますか

頭痛やいらいら、めまい、不眠、ゆううつなどの症状のとき、どの診療科で診察を受けたらよいのか迷ったことはありませんか？　男性医師には微妙なところが話しづらいと困ったことはありませんか？

近年、心や体に不調を抱える女性なら誰でも受診できる女性外来ができています。ほとんどは女性医師による診察です。更年期からくる不調を含め、女性ゆえに抱える家庭内の問題などもじっくり話を聞いて、症状について、患者の心と体を総合的に診る外来です。必要に応じて、専門外来を紹介するなどの役割もします。

女性外来は、男女共同参画社会の実現が叫ばれてから着目されるようになり、設置する病院も全国的に増えています。

※女性外来を受診する際は、事前に料金や診察時間などの内容を十分に納得してから受診するようお勧めします

©タテハナ

■女性外来の現場から

盛岡医療生活協同組合
川久保病院
医師　加藤　幸さん
かとう・みゆき

川久保病院で女性外来を担当している内科医の加藤医師に、その特徴や受診方法を聞きました。

Q　女性外来とは・・・

A　女性のライフスタイルは大きく変わりました。その中で、妊娠、出産、閉経と変化する女性の体。女性外来は、男性とは違う女性の体の仕組みに注目し、心と体を総合的に診療し、女性特有の不調と向き合う外来です。

Q　診療時間はどれくらい・・・

A　初診は、看護師の問診が30分、診察が１時間と長めの時間を設けています。再診は30分程度です。

Q　訪れる患者は・・・

A　８～９割はメンタル面の症状を抱える患者さんです。女性外来を開設して６年目ですが、最近は40～50代の更年期に近い人が多くなってきました。この時期の人は、卵巣機能が低下したり、本人の体質や周囲の環境が変化したりして、「体・心・暮らし」のバランスが崩れがちです。例えば、女性ホルモンが減ってそれだけで苦しくて来たとか、自分の体力が落ちて苦しくて来たとかではなく、この３つの要素が絡み合って来院するケースが多いようです。

Q　背景にジェンダー*を感じますか・・・

A　ジェンダーが関係しないことの方が少ないですね。この外来は医療だけでは解決しないことも大きな特徴で、家族関係や教育、社会の背後にあるジェンダーの問題に直面することが多いです。１人の患者さんの不調に向き合うということは、そういうことだと思っています。心や体は大丈夫だけれど、周りに協力者や理解者がいない人など、取り巻く環境が悪いために不調になっている人は、医療だけでは解決できません。このような人には「健康的に生きるためには何が必要なのだろう」と考えて対応しています。

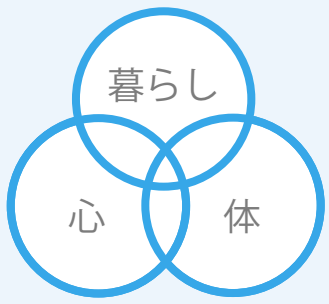
また、各地で講演していると「女性だけではなく、男性にも知ってほしい」という女性参加者の声があります。日ごろから、相手の立場や体質というものを理解することも大切だと考えています。

＊ジェンダーとは

社会的、文化的に形成された性別のことで「男らしさ」「女らしさ」といった言葉で表現される概念。生物学的な性別ではなく、成長の過程で家族や社会から教えられ、後天的に身に付けていく行動や態度などの性差です。

ジェンダーは「男は一家の大黒柱だ」とか「女は家事をこなして一人前だ」といった社会生活での男女の役割分担の概念の基になっています。特に女性には、結婚後、妻や母といった社会的な役割が求められ、「結婚～妊娠～出産～育児」というライフステージの変化の中で、ジェンダー役割の変化が男性よりも課せられることになります。

３つのバランスが大切！



■女性のライフステージと女性ホルモン

女性ホルモンの基礎知識

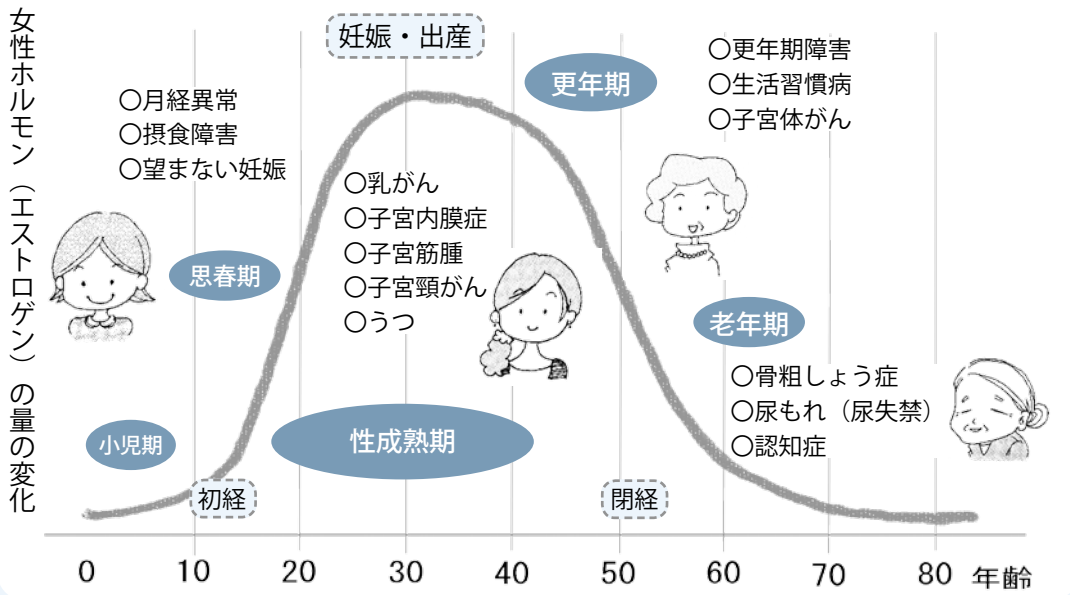
女性の体のトラブルは、女性ホルモン（エストロゲンとプロゲステロン）と密接に関係しています。思春期、性成熟期、更年期、老年期とライフステージによって分泌量が変化します。

女性ホルモンは、妊娠・出産に備える女性特有の体づくりをするだけでなく、自律神経や感情などのバランスを保つ重要な働きをしています。また、性成熟期の女性が心臓病や脳卒中になるのはまれ。これは、女性ホルモンに血液中のコレステロール値を下げ、動脈硬化を予防する働きがあるからです。このように、女性の体や心の健康をサポートする一方、その分泌量の急激な増加や減少は、それぞれのライフステージに特有の悩みや病気をもたらします。

女性のうつ病は男性の1.7倍

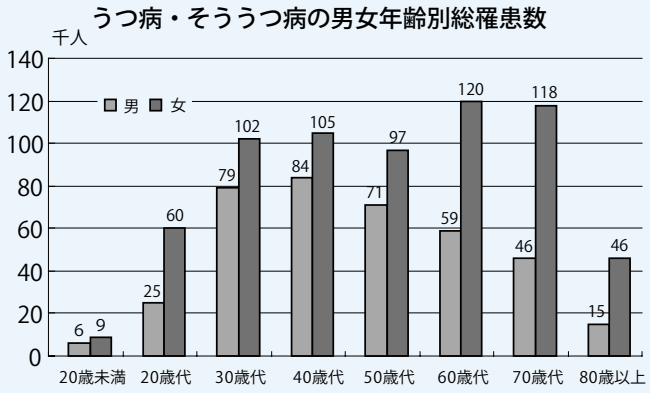
女性ホルモンの分泌量の変化が「うつ」のきっかけになることもあります。また、子どもの受験や独立、親の介護などのライフスタイルの変化や、結婚や出産などの幸せな出来事でも「うまくやらなきゃ」「早く慣れよう」という気持ちから、心が不安定になる場合もあります。うつ病の総患者数は、下のグラフのとおり全ての年齢層で男性よりも女性が多く、女性は男性の平均の約1.7倍になっています。

各ライフステージで起こりやすい健康トラブル（例）



参考資料：社会保険研究所「女性健康手帳」

うつ病・そううつ病の男女年齢別総罹患数



引用資料：平成20年厚生労働省「患者調査」

うつ病とは：ゆううつになって気分が落ち込むことです。不眠や頭痛、めまいなどが見られるほか、食欲がなく、楽しみや意欲がなくなる状態が、長く続く体の不調をいいます。

■女性の心と体を考えた性差医療

かかりやすい病気の男女の違い

女性と男性では、かかりやすい病気に違いが見られます。下の表のとおり、女性では甲状腺の病気や慢性関節リウマチ、男性では痛風や脳卒中が特に多い病気です。また、同じ病気でも発病する年齢や薬の効き方など、男女で異なることがあります。これらの違いが起こる原因に、体の仕組みの差異はもとより、ホルモンバランスや生活習慣の違いの影響があるとされています。

広がる性差医療

1990年に入ってアメリカでは、女性男性の性差による体の仕組みの違いを考慮した医療が求められ始めました。このような考え方に基づく医療が性差医療です。

それまでの西洋医学は、基本的に成人男性の体を基準に研究を進め、発展してきた経緯があります。そして女性の病気を診断するときや治療法などは、男性で得られた成果を単に女性の体に当てはめてきました。そのため、女性には適応できない治療法などが多くあることが分かってきたのです。

そこで、アメリカ政府の主導で、女性の医療を見直す改革が始まりました。1990年代後半アメリカに女性のための大規模な医療センターが設立されました。

日本での取り組み

日本でも2000年ごろから、性差に着目した医療が全国的に広がりを見せはじめました。その１つが「女性外来」です。また、「女性外来」以外の診療科でも女性の体の特性に配慮した診断方法や治療方法が研究され始めています。

特に日本の性差医療では「傾聴」すなわち患者の話を良く聞いた上で、疾患や臓器の状態を診ることが重視されています。ジェンダーの視点を取り入れ、心と体全体を診ていこうとする「性差医療」への取り組みが広がりを見せています。

表　病気別の男女比率（複数回答）

女性に多い病気	
甲状腺の病気	男性の約4.2倍
慢性関節リウマチ	男性の約3.2倍
貧血・血液の病気	男性の約2.6倍
認知症	男性の約1.8倍
高脂血症（高コレステロール血症）	男性の約1.6倍
男性に多い病気	
痛風	女性の約10.6倍
脳卒中（脳出血、脳梗塞）	女性の約1.7倍
糖尿病	女性の約1.5倍
狭心症・心筋梗塞	女性の約1.4倍
腎臓の病気	女性の約1.3倍

引用：平成19年厚生労働省「国民生活基本調査」

～こちら編集室～

「女性外来」がどうしてできたのかをたどっていくと、女性のライフステージに伴うジェンダーの影響が見えてきました。

今や、日本女性の平均寿命は世界一になりました。長く元気に暮らしたいと思うと、心身共に健康に生きていくための知恵が必要になります。家庭の問題や健康の不安などを相談できる女性外来や医療機関が、いつも身近にあってくれたら安心です。

ジェンダーに敏感な医療や病院が増えつつあることは、女性にとって心強いことではないでしょうか。

☆ボランティア編集員募集☆

【任期】 ４月から１年間
【対象】 毎週水曜の日中に活動できる人（イラストや写真が得意な人歓迎）
【定員】 10人
【活動場所】 プラザおでって５階 もりおか女性センター（中ノ橋通一）
【申し込み】 もりおか女性センター本館、別館などに備え付けの申込用紙に必要事項を記入し、３月25日㈮、17時までに若園町分庁舎２階の男女参画国際課へ持参ください。応募多数の場合は選考します
【問い合わせ】 男女参画国際課☎626-7525